

発行所
 札幌市北区北15条西7丁目
 北大医学部同窓会
 TEL&FAX (011) 706-5007
 E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
 http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/
編集人 田中 伸哉
発行人 浅香 正博

北大医学部同窓会新聞



「北大病院陽子線治療センター」

白土 博樹 (57期)

CONTENTS

- (1) ・年頭のご挨拶……………浅香 正博
 ・年頭のご挨拶……………玉木 長良
- (2) ・教授就任のご挨拶……………大場 雄介
 ・春の褒章、叙勲……………阿部 帥
 ・秋の褒章、叙勲……………島田 實
- (3) ・名誉教授
 藤本征一郎先生(39期)を偲んで……………櫻木 範明
 ・名誉教授
 内野純一先生(33期)を偲んで……………武富 紹信
 ・先生ご無沙汰しています…金田 清志
- (4) ・新世紀の医学に向けて(21)
 地方の医療の担い手となる
 青少年育成事業……………長瀬 清
 ・北海道大学ホームカミングデー
 2013の日程決定
- (5) ・新たな診療科
 北海道大学循環器・呼吸器外科
 ………………加賀基知三 松居 喜郎
 ・エルムの仲間達へ
 「ふつうの町の医者の仕事
 突き詰めたい」……………松村 真司
- (6) ・戻ってきた絵「旧本館」…寺沢 浩一
 ・理事会・評議員会報告
 ・フラテ99号発行のお知らせ
- (7) ・総会、新入会員歓迎会のお知らせ
 ・同窓会ホームページニュース募集
 ・告知板 ・新刊書紹介
- (8) ・新刊書紹介 ・ご逝去者
 ・一面の写真説明 ・編集後記

年頭のご挨拶



北海道大学
 医学部同窓会会長

浅香 正博(48期)

新年おめでとうございます。札幌では冬の寒さが厳しくなっておりますが、同窓会の皆様方にはお変わりありませんでしょうか。昨年の後半にはアメリカの大統領選挙、中国の新執行部の就任そしてわが国の総選挙が行われ、迫り来る変革を予期させる年でした。その執行年である本年は国内外で波乱に富んだ年になることが予想されます。北海道大学では、国からの運営費交付金の減額のため昨年9月より教授クラスの給料が約10%減額になりました。東日本大震災の復興のためと説明されています。学内においても明るい話はなかなか見えてきていません。

同窓会新聞の改革が新しく編集委員長になった田中伸哉先生を中心に始まっています。同窓会と同窓生をつなぐ重要な役割を果たしている同窓会新聞をもっと同窓生のために活用しようという試みです。まずは、紙媒体のみであった同窓会新聞を北海道大学医学部同窓会のホームページから読むことができるようにいたしました。このことによりいつでも同窓会新聞から情報を得ることが可能になると共にこれまで会員2にならなければ読むことのできなかった他大学出身の方々にも読んでいただ

くことが可能になりました。現在、北海道大学医学部並びに北海道大学病院には多数の他大学出身の方たちが来られておりますので、同窓会新聞に掲載される情報は北海道大学医学部同窓生と同様に有用であることを確信しております。さらにこれまで一方通行であった同窓会新聞と同窓生との関わりを一新させ、同窓生からも気軽に現状を述べていただくコーナーを設けようと考えております。同窓会新聞のみならずホームページ上からも同窓生との双方向の対話ができないかどうかについても検討を始めました。同窓会新聞の編集委員は大幅に若返りましたので、新しいものへの挑戦するエネルギーは十分すぎるくらいあると信じています。

医学部創立100周年まであと6年と迫って参りました。創立90周年を盛大にお祝いしましたが、何と云っても100年は大きな区切りですので、医学部と連携を深めて同窓生の方々にとって有益で素晴らしいものになるよう企画していきたいと思っております。最後に、北海道大学医学部同窓会会員の皆様方のご健勝を心からお祈りし、年頭のご挨拶といたします。

年頭のご挨拶



医学研究科長・医学部長

玉木 長良(会員2)

新年、明けましておめでとうございます。

大学院医学研究科長・医学部長に就任して2年になります。現在、医学研究科では種々の大型研究プロジェクトが進んでいますので、今年度からスタートしたプログラムを紹介させていただきます。まず橋渡し研究加速ネットワークプログラムが内定し、大型シーズ研究が二件北大から採択されています。また「自己骨髄間質細胞移植による脳梗塞再生治療」が今年度の革新的医薬品・医療機器・再生治療製品実用化促進事業に採択されています。他方、ガンプロフェッショナル養成基盤推進プランも採択され、がんの専門家を養成する人材育成計画を加速化しています。北大病院では臨床研究中核病院にも指定されました。基礎研究では卓越した大学院拠点形成支援補助金を得て、大学院向けの研究体制の整備を進めています。

医学部、医学研究科では人材育成や種々の教育プログラムの充実に力を注いでいます。医学研究科ではレギュラトリーサイエンス部門を立ち上げ、医薬品医療機器総合機構(PMDA)から教授をお迎えし、人材育成を図る体制を構築しています。また、医学教育推進センターを設置し、医学教育の専門家をセンター専

任の教授としてお迎えしました。また大学院の活性化を推進し、様々な経歴の方々が進学しやすいよう、大学院の多様化を図っています。卒業前から基礎研究に進むMD-PhDコースでは毎年数名の入学者がいます。また卒後臨床研修と併行できる新しい大学院プログラム(北大クラークコース)も来春からスタートします。また優秀な大学院生にインセンティブがつくよう、新しい奨学金制度をはじめ様々な経済的支援を企画しています。

若い医師の大学離れが進み、地域医療が崩壊しつつあると言われている中、魅力ある教育・研究プログラムを推進することで、北大医学研究科に卒業生はもちろん、全国から優秀な医師・研究者が集い、多くの留学生が交流できる環境作りを推進していきたいと考えています。

この1年余りで10名を超える新しい医学研究科教授会の構成員が加わりました。新任の先生方も加えて新しい体制を作り、さらに魅力ある医学研究科へと邁進したいと考えています。同窓会の皆様におかれましては、本年も引き続き北海道大学医学研究科・医学部への深いご理解と暖かなご支援をいただけますよう、お願いを申し上げます。

教授就任のご挨拶



生理学講座
時間生理学分野

大場 雄介
(72期)

平成24年11月1日付で北海道大学大学院医学研究科生理学講座時間生理学分野(生理学第一講座)の教授を拝命しましたので、謹んでご挨拶申し上げます。生理学講座開設以来90余年の歴史ある教室を担当させていただく機会を頂戴したことを大変光栄に思うと同時に、その責任の重さをひしひしと感じております。私は平成8年に本学医学部医学科を

卒業(72期)し、大学院(病理学第二講座、長嶋和郎教授、現名誉教授)に進学いたしました。2年間外科病理を修練した後、国立国際医療センター研究所の松田道行先生(現京都大学教授)の元で、望月直樹博士(60期)に実験の手ほどきを受け、細胞内シグナル伝達研究を開始しました。学位取得後は大阪大学微生物病研究所助手(松田教授)、東京大学大学院医学系研究科助手(谷口維紹教授、現東大生産研特任教授)を経て、2006年から本学病態医科学分野(旧臨床検査医学講座、川口秀明教授、現名誉教授)に准教授として戻って参りました。所属分野としては分子細胞病理学

分野、腫瘍病理学分野(田中伸哉教授)と配置換えを経ておりますが、研究課題としては蛍光バイオイメージングによる細胞機能の可視化を軸に研究を続けております。時間生理学分野(生理学第一講座)では、特に第三代伊藤真次教授、第四代廣重力教授、五代本間研一教授と本間さんと教授による神経内分泌生理から「生体リズムの研究」への発展した研究に代表される、世界をリードする最先端かつ独創的な研究が行われてきました。これまでの第一生理の諸先輩が培ってこられた伝統を継承しつつ、私の持つ経験を融合・発展させ、バイオイメージングを基盤とした新たな細

胞生理学研究を展開したいと考えております。そのために医学部学生や大学院生など若手研究者が熱意をもって基礎医学研究に取り組める環境を創り、人材育成に努める所存です。また、学部教育の充実を図り一人でも多くの基礎医学者を育成することは、医学部卒業基礎に進む人材が少ないことが医学部教育の大きな課題である昨今、私に与えられた最大のミッションのひとつであると存じます。同窓会の諸先生のお力をお借りしながら若手を教育し、次世代のリーダーとなる生理学者を育てていきたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

春の褒章、叙勲



瑞宝中綬章

阿部 帥
(38期)

叙勲の榮に浴して

平成24年春の叙勲において、はからずも瑞宝中綬章受章の榮譽に浴しました。これも偏に長年にわたって母校および同窓の皆さまより頂きましたご指導・ご厚情の賜と深く感謝申し上げます次第です。北大卒業50年、喜寿での受章は人生の区切りを強く感じるものとなりました。

私は、満州からの引き揚げやその後の病氣療養などのため、まともな

教育を受けられませんでした。それだけに北大入学後の学生生活は充実感で満たされ、講義は新鮮でした。先生方の講義から医学医療の学識のみならず、その後の人生の指針となる糧が得られたように思います。卒業後インターンの時、入局したいと考えていた第二内科の鳥居教授が東京医科歯科大学へ転出し、私も医科歯科大に入局しましたが、先生は赴任後3か月で黄疸が出現、翌年1月逝去されました。10月に次の教授が着任し、血液学の指導を受けることになりました。その後、カナダに留学中に、指導教授が筑波大学の創設に関わり転出し、私は呼び戻されて昭和49年に筑波大学に赴任しました。

筑波大学は、医学部門の態勢が整ってから約30年余りの若い大学で、大学としての評価を下すには拙速に過ぎるかもしれません。しかし、少なくとも医学教育を見る限り、筑波大学が改革の先導的役割を果たしてきたことは確かなように思います。私が医学専門学群長として主導した最大の改革は講義を大幅に減らしてそれまでの臨床実習を排し、クリニカルクラークシップ(C.C.)を導入したことです。この改革は現行の78週のC.C.(全日制)の礎となりました。また、C.C.を充実するに当たって附属病院および学外教員の充実を迫られ、文科省に臨床教授制度の導入を要請したところ、翌年から制度化したことは

深く印象に残っています。副学長(改革・医療・財務担当)としては大学院の大研究科への再編について全学の合意を取り付けて文科省の合意を得たことが筑波大学最後の仕事となりました。研究面では国際的な賞を受けるほどの立派な研究はできませんでしたが造血障害の研究では一定の評価を受けることが出来たと感謝しているところです。

筑波大学の定年退職一年後に茨城県立医療大学の学長として招かれ、6年間で医療職の教育を軌道に乗せることが出来ました。

重ねて深謝申し上げます次第です。

秋の褒章、叙勲



旭日雙光章

旧島田外科医院々長
現介護老人保健施設
マオイの里施設長

鳥田 實
(専旧7期)

「叙勲の榮に浴して」
私、此の度、平成24年秋の叙勲により「旭日雙光章」を授与され、宮中豊明殿に於て、拝謁を賜りました。非常に長い間、地域医療に盡力した功績を評価されての受章であります、

勿論、私一人の力ではありません。諸先輩の御指導初め、私を支えて下さった諸先生達や、スタッフの諸君、特に家族の助けによるものであります。私一人勲章を戴き、身に余る榮譽であります。

余生、幾許もありませんが、今後も一層職務に精励、精進致す覚悟であります。皆様の猶一層の御教導を、お願い申し上げます。



名誉教授 藤本征一郎先生(39期)を偲んで

北海道大学大学院医学研究科
生殖内分泌・腫瘍学分野 教授

櫻木 範明(52期)

私どもが敬愛する北海道大学名誉教授藤本征一郎先生は平成24年11月24日に逝去されました。

先生は昭和38年3月に北海道大学医学部を卒業し、1年間の実地修練修了後、昭和39年4月に同産婦人科学講座に入局されました。昭和46年3月に医学博士の学位を取得し、昭和47年4月～昭和49年5月に米国ミシガン州立大学および米国ロックフェラー大学に留学し、生殖内分泌学の研究に従事されました。昭和49年5月に

同附属病院講師、昭和60年8月に同産婦人科学講座助教授に任ぜられ、昭和62年8月に教授に昇任し、平成14年3月の定年退官まで産婦人科学の教育、研究、臨床に従事されました。

教授在職中に、医学部附属病院分娩部部長、同輸血部部長、同病院長、北海道大学評議員などを歴任され、医学部および同附属病院の運営、発展に尽力されました。

先生は人材育成と国際交流促進にお

おいにリーダーシップを発揮され、先生の薫陶を受けた多くの産婦人科医が診療、研究に活躍しています。研究活動は多岐にわたり、周産期分野ではヒツジを用いた実験により、妊娠中の母体血圧の低下が胎児脳室周囲白質軟化症をもたらすことを明らかにされました。また、B型肝炎母児間垂直感染予防法の確立、妊婦甲状腺機能スクリーニング体制の確立、破水の高精度診断のための羊水中AFP測定キット開発などに成果をあげられました。「胎児染色体異常の出生前診断に関する総合的解析」の功績に対しては平成11年に北海道医師会賞、北海道知事賞が授与されました。一方、婦人科腫瘍については、子宮頸癌、体癌、卵巣癌それぞれの傍大動脈リンパ節転移の特徴と予後との関連

を明らかにされました。

学外においては、大学評価・学位授与機構学位審査委員会委員、日本学術振興会特別研究員等審査会委員、総合科学技術会議・生命倫理専門調査会専門委員(内閣府)、全国医学部長病院長会議理事、日本医師会・生命倫理懇談会委員などを務められました。

退官後は、複数の病院の病院長を歴任され、地域医療に貢献されました。先生は平成24年4月から闘病生活を送られていましたが、11月に享年満74歳の人生を閉じられました。先生が開拓し、歩み続けてこられた若手の育成、地域医療への貢献、国際交流の促進への道を私ども後輩は力を併せて継承し歩んでいく所存です。ここに謹んでご冥福をお祈り致します。



名誉教授 内野純一先生(33期)を偲んで

北海道大学大学院医学研究科
消化器外科学分野I 教授

武富 紹信(会員2)

名誉教授 内野純一氏は、平成24年12月2日に逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和28年4月に北海道大学医学部に入学、同32年3月に卒業されました。インターンを経て同34年、北海道大学医学部第一外科に入局されました。昭和41年に北海道大学医学部助手に採用され、同47年に同講師、同58年に

同助教授を経て、同60年3月に同教授に昇任されました。平成8年3月、本学を停年退職後、同年4月、北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

研究面においては、障害肝の肝切除や肺結核の外科治療、肝癌細胞の培養、ヌードマウス移植、抗AFP抗体などの研究に携わり、さらには小児肝芽腫、神経芽腫や先天性胆道閉鎖症など小児外科領域を担当され、その病態、治療

について研究されました。

診療面では、Surgical Oncologyの概念を早くから持たれ、外科治療のみで満足することなく、化学療法や抗体治療にも力を注いでおられました。肝エキノコックス症についても、世界に先駆けて超音波による検診システムを構築し、この国際的な業績に関しましては、札幌で国際シンポジウムが開催され、北海道医師会賞、北海道知事賞も受賞されています。

教育としては、教授在任中に、実に78名もの多くの博士号取得者を輩出され、主な学会活動としましては、平成4年に日本小児外科学会、平成7年に日本癌治療学会の会長を歴任されました。また、

定年退官後は釧路労災病院の病院長に就任され、道東地区の地域医療にも貢献されました。

以上のように、先生は長年にわたり、消化器外科及び小児外科を中心とした外科治療に関して、幅広い研究活動に尽力されるとともに、国内外の学術振興、人材育成に多大な貢献をされました。私たち教室員一同は、内野先生の足跡を私どもの手でさらに発展させていく覚悟でございます。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生ご無沙汰しています

定年後の生活はどのようにすごされているのでしょうか？

北大医学部定年退職は2000年3月です。退職後の同年4月から労働福祉事業団・美唄労災病院・院長として勤務致しました。卒後研修の変更はまだ起こっていない時期でしたが、医師不足が起こっていて病院運営が厳しくなっていた時でした。そんな事で、本州の大学へ研修医派遣のお願いに参り、複数の大学から研修医派遣のご理解を戴だけ診療に大きな助けになりました。あの当時美唄労災病院で一緒に診療していた何人かの先生方が、現在、国内学会・国際学会で発表や論文投稿で大変活躍しておられ、お一人は最近本州大学の教授に就任され嬉しい限りでございます。

2007年3月に労災病院退職してから、現在も外来診療と脊椎疾患治療で脊椎手術を行っています。国内学会・国際学会に最近の進歩を学びたいと思まだ出席しています。労災病院勤務中の2004年にInternational Society for Study of the Lumbar SpineからSpinal Instrumentationの開発と脊柱再建応用への貢献ということで

Wiltse Lifetime Achievement Award (USAの脊椎外科医で脊椎手術の開発に貢献した国際的に有名な脊椎外科医Prof. Wiltseを記念した学会賞)を戴きました。2010年にScoliosis Research SocietyからHarrington guest lecturerに指名され、Anterior spinal instrumentation応用の脊柱側弯症前方再建手術の特別講演をさせられました。2011年にはNorth American Spine Societyから之も毎年一人に授与されるWiltse Lifetime Achievement Awardを授与されました。Lifetime achievementなど、私に出来ているはずなど有り得ませんが、そろそろSurgeryから手を引くべきかなと……。

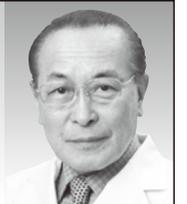
現在、私は外来診療で高齢者の診察が圧倒的に多いのですが、健康診断で重度な疾患が指摘されていない状態で、寝たきりとなっている方がかなり居られることを認知させられています。日本は世界で最先端の高齢社会を邁進しており平均寿命の延長は嬉しいことですが、寝たきり高齢者が多くなっていることが社会的問題です。自立生活のできる健康寿命維持を求めてゆくことが重要な課題です。平成25年度から始まる国民の健康づくり運動「第2次健康日

本21」に「ロコモティブシンドロームの認知度向上」が組み込まれることになったとの事です。私はこれからの外来診療では、ロコモ普及と運動器の健康づくりのため、高齢者診療に自分の高齢化も自覚し頑張っていきたいと思っています。

教授時代の思い出はたくさんありでしょうけれども、その中で1つ2つあげるとすればどのようなものでしょうか？

私は脊椎疾患治療に研究を向け、Anterior spinal instrumentationの開発とその応用に集中してきました。1996年USAのFDAよりKASS (Kaneda anterior scoliosis system)の臨床応用が承認されてから、USAでの5つの大学病院で手術供覧依頼があり、その後Canada、そしてヨーロッパで11カ国、中東、アジアで6カ国の19カ国、32大学病院で、KASS応用の脊柱側弯症前方再建手術供覧を依頼されました。2000年3月の丁度北大退職寸前でしたが、American Academy of Orthopedic Surgeons (AAOS)と共同開催のOrthopedic Research Society学

名誉教授 金田 清志(38期)



会でArthur Steindler Awardを授与され、“胸腰椎疾患の前方再建手術の適応と成績”の受賞記念講演をさせられたのは記憶に残ることでした。

北大医学部の後輩へ、先生からメッセージをお願いします。

医学に携わる私達は、先人の経験と研究から事実となった多くの基本知識を学んでいます。医師は発展続ける医学を生涯学徒として学んで行かねばなりません。このような見聞の蓄積から会得した知識で日常診療に当たっているはずですが、そのような中で、疾患病態治療で順調に進んでいないような事実には、自分たちが学び取った知識から実施していることに思慮深い懐疑を抱き、本来それ自体が持っている解決されねばならない問題を根本に立ち返って考える姿勢を育成してゆくことが重要ではないでしょうか。そのような姿勢“懐疑”が、新しい研究に繋がる“創造”を生み出す機会となるのだと思います。こんなことを私は自分の経験で何度も諭されてきました。

インタビューー 岩崎倫政(会員2)

新世紀の医学に向けて (21)

地方の医療の担い手となる青少年育成事業

北海道医師会長 長瀬 清(40期)



医師不足と偏在で地域医療が崩壊の危機にあると言われて久しくなります。官民挙げての対策も焼け石に水の状況です。北海道医師会では、道と共に将来地方の医療の担い手として地域に育つ少年・少女に早期に医療への意識を持ってもらおうと本事業を始めました。

昭和30、40年代医師不足が問題となり、一県一医大政策により次々と新設医大、医学部が誕生しました。田中角栄首相の時代です。その波に乗って昭和48年旭川医大が創設されました。当時の医師数は人口10万人対で全国約110人、北海道は約90人でした。その後、昭和57年頃には医師数は目標とした150人を超え、逆に医師過剰と言われるようになり、昭和57年閣議決定により医学部入学者数の削減が図られることになりました。見通しが甘いと言わざるをえません。

平成16年度より新医師臨床研修制度が開始されました。開始前から大学での研修医指導者の必要性から大学より派遣されていた医師の呼び戻しが始まっています。そのために地方での医師不足が急速に生じてきました。都会から離れた地方で医師不足の声が上がり、それと共に勤務医の過重労働が問題化し、自ら地方病院から逃れて大都市で開業するという流れができ、更に地方の医師不足が顕著になりました。医師不足が社会問題化し、様々な対策がとられました。北海道でも平成15年医療対策協議会が組織され、医師派遣、医師養成、自治体病院の集約化を検討する分科会が作られました。

緊急臨時的医師派遣事業、北海道地域医療振興財団(熟年ドクターバンク、女性医師バンク)、女性医師支援窓口、奨学金付地域枠制度等々の対応があります。また、国は医学部学生の増員を2019年までの10年間各校120~125名まで許可、その後140名超まで認可する等々の対策が企画実行されています。

北海道では、大学入学者の多くが道外出身者で、卒業後道外出身者の多くは地元へ帰り、残った者も

やがては道外へ去ること、また研修医として道内大学、市中研修病院を選択する者が卒業総数を大きく割り込む状況が続いています。

このままでは北海道の地域の医療は将来とも活性化は望めません。たとえ医師数が増加したとしても、都市から離れた地方の医療は満たされないでしょう。24年12月1日付け朝日新聞によれば、東大医科研の研究から、医師数が現在のまま推移しても20年後も高齢者の増加で依然として医師不足が続くと云われています。政策介入による地方医療に就労する医学教育をするか、行政による強制的な地域医療への就労義務化も起こるでしょう。

北海道医師会は行政と、小学高学年および中学1~2年生を対象に、医師、看護師、薬剤師等医療関連職種を意識し学習意欲を増進する試みを始めました。自治医科大学から広島大学に移られ研究されている松本正俊准教授の論文によると(松本正俊ほか:エビデンスに基づく地域医療教育—文献レビューと政策への適用—、医療と社会2012;22:103-112)地域出身の医師は将来の落ち着き場所を自分の生まれ育った地域にする傾向があると云っています。これは日本ばかりではなく欧米諸国でも同様という論文が数多くあります。

私は医療対策協議会の会議の中で、目の前に受験を控えた高校生に医療への道を奨めるのも必要ですが、それよりも小中学生に意識をもって頑張ってもらうのが必要と主張してきました。道外出身者の多くの方々が北海道の医療を支えてくれたことに感謝していますが、それでも足りません。自力で賄う必要があります。道内生徒の学力では、目的達成には問題があります。学力的にもっと底上げが必要です。

我々は、本年8月26日日本別町中央小学校の5、6年生約90名を対象に医学的講話を行い、引き続き医学体験実習を行いました。生きること、寿命、臓器移植、免疫等生命の仕組みを解説しました。小学生には少し難しい話でしたが、私語すること

なく熱心に耳を傾けてくれました。その後の体験実習では、聴診器を使ったり、手術衣を着、帽子・マスク・ゴム手袋をつけ、胃ファイバースコープや超音波の説明、AED・心マッサージ体験(写真)をし大喜びをしました。一度の訪問ではその時の感激も薄れてしまうので、時を経て(2ヶ月後)再訪し、丁度山中教授がノーベル医学・生理学賞を受賞されたときで、それを話題に話をしました。生徒達はこの2ヶ月の間に学習発表会のために「夢の教室」という合唱曲(作詞生徒全員、曲は指導の先生)を作り、みんなで歌って聞かせてくれました。その一所懸命歌う姿を目にし、涙が流れるような感動を受けました。きっと思いは子供達に伝わっていると感じました。夜は、父兄、教育関係者、町民の方々に、北海道の地域医療の現状と将来について話し、地方の地域医療を守るのは地域で生まれ育った子供に医療の道に進んでもらい町を背負って立つという意識付けをしたいと訴えました。

10月26日には名寄市を訪問。市内3中学校の1、2年生約30名に講義をしました。今回は対象が中学生でややレベルを上げ、医学の始まりと医療技術の進歩発展、移植医療と再生医療等高度な医療についてなどを話しました。その後の臨床体験実習では血圧測定、MRI、超音波検査等の体験実習や見学などに参加し、興味を示していました。



夜は、地域医療の現状と将来の地方の地域医療の担い手は地元で育った若い医療者に託さなければ、地域が崩壊してしまうと協力を訴えました。

これを進めるためには、北海道の生徒の学力を伸ばさなければなりません。全国の子供の学力比較では北海道は他県と比較するとかなり低レベルにあります。決して頭脳が劣っている訳ではありません。テレビやゲームに向ける時間が他と比べかけ過ぎであること、従って勉強に充てる時間が少ないこと、目的意識が低いことによります。如何に動機付けをするかが問題です。

事業を始めるに当たっては、学校にお願いをし、ただ話をさせてもらえばよいという単純なものではなく、地方の行政、教育委員会、学校、自治体病院、医師会と父母の皆さんと密に接触し、了解を得てやらなければうまくいきませんから、下準備に大変な手間暇が必要です。それを乗り越え始めて出来ることです。今年は本別町と名寄市で開催しました。両市町とも市長さん、町長さんが共に熱心でバックアップしてくれたこと、その他の皆さんの絶対的な支援があったことに、感謝しています。北海道内くまなく回らなければなりません。大変な仕事であると思っています。継続は力なりを信じてやるばかりです。先輩、後輩諸氏の応援をよろしくお願い致します。

北海道大学ホームカミングデー2013の日程決定

平成24年10月6日(土) 会場 北海道大学札幌キャンパスで開催

北海道大学ホームカミングデーは、北海道大学を卒業された同窓生の方々が、学部・学科や地域をそして年代の枠を超えて母校に集い親睦を深めることで、同窓生相互の発展と連帯強化につなげよう

と初めて企画したものです。

また、思い出多いキャンパスで、母校の現状や教育研究の諸活動などをご紹介するとともに、恩師、教職員及び学生と交流することにより、同窓生の方々と北海道大学の連携が強まり、相互理解が深まるものと考え開催しました。

当日は、卒業生をはじめたくさんの来場者がキャンパスを訪れ、旧友と旧交を温め、恩師と語り、初秋の一日を楽しまれました。

なお、来年度のホームカミングデーは平成25年9月28日(土)に開催予定です。詳細については、総務企画部広報課 地

域連携・基金事務担当(TEL:011-706-2012/2153 E-mail:home@general.hokudai.ac.jp)にお問い合せください。

ホームページアドレス
http://www.hokudai.ac.jp/pr/alumni/home/

「新たな診療科 北海道大学循環器・呼吸器外科」



循環器・呼吸器外科 加賀基知三(診療准教授,呼吸器外科担当)、松居 喜郎(教授,診療科長)(56期)

北海道大学医学部外科系診療科の再編に伴いまして、循環器・呼吸器外科として再出発することになりました。北海道大学において「呼吸器外科」は、旧第二外科(腫瘍外科学)のなかの呼吸器グループとして存在しました。臓器別診療科構想の一端として旧第二外科は消化器外科Ⅱとなり、呼吸器グループは循環器外科と合流し「循環器・呼吸器外科」が発足となりました。内容はいわゆる胸部外科となりますが、私たちはこれを新しい形の協力体制ととらえています。北海道大学では診療科名として初めて登場した「呼吸器外科」の立場から、その成り立ちや現状、今後の展望について紹介します。

呼吸器外科の成り立ち そもそもわが国における胸部外科のはじまりは、肺結核の外科治療としての「肺外科」でありました。(第一世代) 良性疾患に対する機能温存手術として区域切除が盛んにおこなわれたのもこの時期です。化学療法が発達とともに肺結核は減少し、肺癌に対する肺葉切除が主体となりました。(第二世代) また、限界に挑戦する目的で拡大手術、合併切除なども盛んに行われましたが、その手術成績は不安定なものでした。エビデンスの構築とともに拡大手術の手術適応は限定されることになりました。一方では新しいアプローチとして胸腔鏡手術 Video-assisted Thoracoscopic Surgery (VATS) が登場しました。(第三世代) 当初、その安全性や根治性の面から敬遠されましたが、次世代の外科医にとっては魅力あるもので徐々に全国に広まりました。現在はまだ発展途上にありますが、呼吸器手術の標準的なアプローチとなりつつあります。

北海道での呼吸器外科 わが国における死因別死亡率の1位は癌ですが、その中でも急増する肺癌が1995年以降は断然1

位です。年間死亡者数は男性50,395人、女性19,418人(厚生労働省「人口動態統計」2010年)で、なおも増加中です。一方、北海道における肺癌死亡率は18.8(75歳未満年齢調整死亡率、人口10万年対、全国平均14.9、2009年)は全国1位です。この原因はまさしく男性35%、女性16%(ダントツトップ!)の高い喫煙率に他なりません。健診の受診率の低さも加え、がん対策の立ち遅れは医療施設のみでの責任ではなく、官民一体となった取り組みが必要です。

北海道大学では早い時期から胸腔鏡手術に着手して、わが国における低侵襲手術の先駆的な役割を果たしました。現在では二窓法Two Windows Method、一窓法one window and punctures method を確立し、世界で最も小さな傷の手術を実現しました。しかし、一方では進行肺癌に対する拡大手術や集学的治療としての手術にも積極的に取り組み、「早い時期の肺癌には呼吸機能を温存した区域切除などの縮小手術および胸腔鏡を用いたより低侵襲な手術の追及」と「進行した肺癌には化学療法、放射線療法と組み合わせた外科切除の安全性の確保と治療成績の向上」を診療、研究の2本柱として現在にいたっております。図1に本学における肺悪性腫瘍手術の推移をグラフに示します。肺悪性腫瘍の外科治療の対象が年々増加していることが明確にわかりますが、低侵襲手術の比率が極めて高いことが本学の呼吸器外科の特徴です。またあらゆる方面のバックアップが得られるのも、一般病院やがんセンターにはない本学の特徴でもあります。より低侵襲な手術を実現することは、今後増加する高齢層や耐術能の低い症例にも治療の可能性を広げることにもなります。肺癌の死亡率を減少させるためには、関連診療科と連携した集学的治療や基礎医学教室との研究協力体制が不可欠です。

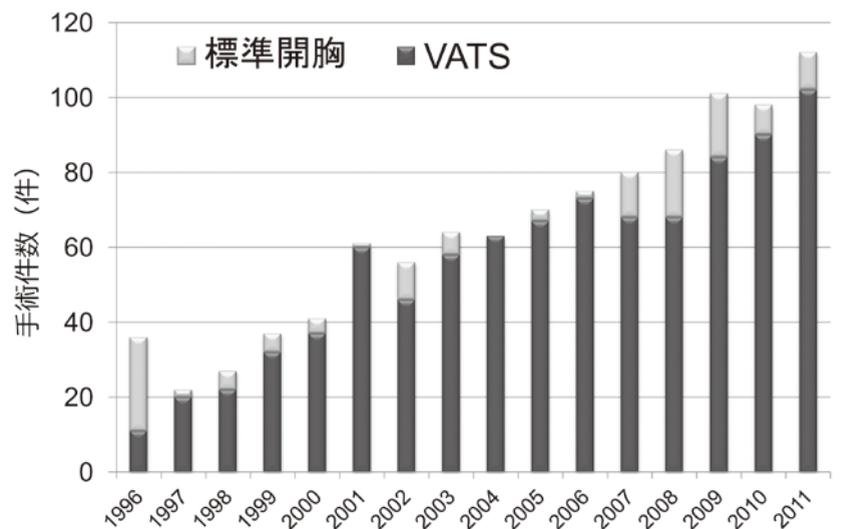
今まで構築した体制をさらに強力なものとしつつ、循環器・呼吸器外科としての新たな協力体制によって相互の発展が期待されます。

呼吸器外科と循環器外科のコラボレート 進行肺癌に対するエビデンスが明らかとなることは、別の意味では外科治療の限界を知ることにもなります。もちろんエビデンスは自らが作っていくもので固定的なものではありませんが、全身疾患systemic diseaseに対して外科治療は無効です。しかし局所疾患local diseaseにもかかわらず、歯がたたないこともあります。いわゆるT3-4(胸壁・脊椎浸潤、心臓大血管浸潤)肺癌などです。合併切除して再建する、人工心肺回路下に合併切除する、また最近では大動脈ステントを留置して大動脈壁を合併切除することが今の私たちには可能です。一方、低侵襲心臓血管手術 Minimally invasive cardiovascular surgery: MICSは冠動脈バイパスや弁置換術に対して行われている低侵襲手術です。本学の

呼吸器外科では早くから胸腔鏡手術を取り入れ、すでに安定した技術として確立していますので、さらなるコラボレートで新しい低侵襲心臓血管手術が実現できます。北海道大学病院は2010年7月に心臓移植実施施設として認定され、シミュレーションや研修会を繰り返し、第1例目心臓移植実施まで秒読みの段階です。現在わが国における肺移植認定施設は8施設です。北海道で肺移植を実現しすべての臓器移植が道内で完結することが次のわれわれの責務と心得、次の世代に向けてすでに動き出しています。

おわりに われわれの目下の仕事は良質な外科医を育成することにあります。外科医志望者数の減少は近い将来、医療全体の大きな問題となると危惧しています。魅力ある未来を創造し指南することはもとより、互いに協力して外科の魅力を親切に伝える努力も必要です。新しい「循環器・呼吸器外科」に期待して下さい。

北海道大学病院での肺悪性腫瘍手術の推移



2011年：胸腔鏡手術102例(91%)

エルムの仲間達へ「ふつうの町の医者仕事を突き詰めた」



松村 真司(67期)

平成3年卒なので、医者になってすでに21年が過ぎたことになる。町医者の跡取りとして憧れの北大に入り、「どうすれば楽に町の医者になれるか」を考えたあげく、あえて母校を離れて総合診療の道を選び、最終的には生まれ故郷、東京世田谷の町医者となり10年以上が早くも経った。町の医者を目指して自分なりの道を追求した年月は、この間の医療をとりまく社会の激変の中では、紆余曲折があるように見えたが振り返ってみるとまっすぐな一本道だった。結局自分がしたことは、両親がやっていた平凡な医院を、昔ながらのスタイルそのままに継承しようとしただけのことだったが、実はその「ふつうのこと」が「ふつうでなくなった」こと自体が根本の問題ではないかと思っている。ただ、そのような問題が生

じることになった構造は極めて複雑で、解決も容易ではない。しかし解決を迫る社会の圧力は私たちに一刻の猶予も与えない。そんな中、自分は自分なりの方法で、半ば意地になって活動を続けてきた。町の医者としてアカデミアに出入りし、町の医者としてのアカデミアに出入りし、町の医者の肩書で学生や研修医と語り合い、かつて自分が志した道を目指す後輩たちのために、診療・教育・研究の全てにバランスをとつつ過ごしている。特に私は、地域の医師たちの日常の仕事に光があたることを願い、町医者としての立ち位置を変えないように心がけている。地域の医師たちの主な仕事、それは日々の外来診療であり、患者さんとのやりとりであり、その中で遭遇する日常の出来事である。どうすれば外来がうまくできるのか、どうすれば地域の人々とよい

関係が築けるのか、そしてどうすれば仕事楽しくなるのか。それらは自分が、そして自分のような地域の医師たちが日々直面する問題である。そんな問題に対し、多くの協力を得ながら少しでもよい方向に向かえばと願いつつ、ドンキホーテのような無謀な突撃を繰り返している。以前お仕事で縁があった社会学者の上野千鶴子さんには、そんな私のスタンスを、「周回遅れのトップランナー」と表現していただいた。先頭から大きく遅れても、諦めずに走っていたらいつの間にかトップにいた、そんなふつうの町の医者をするふつうの仕事、これからもいろんな角度から突き詰めていきたい。

松村医院

<http://www.matsumura-iin.com/>

原稿募集!

会員の声を幅広くとり入れるため、新設コーナー「エルムの仲間達へ」を設けました。下記の要領で募集いたしますので、皆様からのご応募をお待ちしております。

- (1) 字数は本文1900字以内でお願いいたします。
- (2) 顔写真を1枚おつけください。
- (3) サブタイトルはご自由におつけください。
- (4) 原稿締切は4/20(5月号)、8/20(9月号)、11/10(1月号)とさせていただきます。

※なお、多数の方からお送りいただいた場合は、先着順とさせていただきますので、ご了承くださいませ。

戻ってきた絵「旧本館」

法医学分野 寺沢 浩一(54期)

数年前に旧本館(事務所)のレリーフのいわれについて調べていた時に、北大昭和21年卒業(22期)で学部長をされていた(昭和52年5月7日から7月15日まで(事務取扱)、7月16日から昭和56年7月15日まで(学部長) 恩村雄太名誉教授(旧病理学第二講座、昭和40年から60年まで教授)にお尋ねした際に、この絵の存在をお聞きした。「百年記念会館に貸してあり、まだ戻ってきていない」とのことだったので、館内にかけてあった実物を見に行ってきたことを思い出す。

この絵は『北大医学部五十年史』(昭和49年発行)の41ページの中扉にカラーで掲載されている。KUWABARA 1966と書かれている。

本年9月10日に恩村先生にお電話を差し

上げた。元気な声でいらした。昭和52年、私が学部6年生のころ、その日の国家試験の勉強会が済むと仲間と一杯やるのが常であったが、酔うと夜分遅くに先生のお宅に電話をかけては、卒業試験にまつわる愚痴や何やらを聞いていただいた、懐かしくも恥ずかしい記憶が戻ってくる。先生が部長でいらしたころで、お忙しいところ本当にご迷惑をおかけしたと赤面である。それでも聞いていただいたことでやる気も生じて、国家試験には順当に皆合格した。

お電話でお話くださり、次のようなことが明らかになった。旧本館(大正12年8月30日竣工、1階事務所、2階教授会会議室)を恩村先生は事務所と呼んでいらっしやだったので、以下事務所と書く。事務所は歯学部がその創設時(昭和42年)から

昭和45年まで使用し、その後取り壊された。事務所にその絵が掛けてあった。絵の中央に事務所が描かれていて、その右側が生化学、左側が結核研究所とのことである。この絵がどういう経緯で描かれたものかはご存知ないとのことであった。

百年記念会館ができた際に、飾るものがないようだったので貸した。北大80周年のとき、杉野目学長のときにクラーク会館が建てられた。法学部出身の今村学長のときに農学部、理学部、工学部と恩村医学部長の4人が中心となって百年記念会館が建った経緯から、絵を貸すことになったとお話であった。ちなみに、入口の館名の文字は恩村先生が書かれたとのことである。

「なぜなかなか戻ってこなかったの

しょうか」と私の質問に、「定年になってからは口出しをしないことにしていた。皆さんの思い出が描かれたこの絵が百年記念会館に飾られているのも悪くはないと思うようになっていた」と先生は述べられ、「どうかこの絵を大事にしてください」と結ばれた。

※恩村先生が1月3日にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈り申し上げます。



左:「医学部正面玄関」(旧本館)
右:「中庭より望む南講堂」

理事会・評議員会報告

理事会

日時:平成24年11月26日(月)
開会 午後6時00分
閉会 午後6時50分
場所:医学研究科管理棟(2階) 大会議室
出席者:理事10名、監事1名、評議員会議長

評議員会

日時:平成24年11月26日(月)
開会 午後7時00分
閉会 午後7時50分
場所:医学部学生会館フラテ(1階) 大研修室
出席者:評議員・予備評議員54名(出席18名、委任状提出36名) 理事、監事 9名

【報告事項】

- 1.編集報告について
編集担当理事から、次のとおり報告があった。
・同窓会新聞は6月に142号、10月に143号を発行し、現在1月号(144号)の発行に向け、掲載する原稿をお願いしているところである。
・今年度は同窓会名簿を発行する年であるが、12月上旬に会員に発送できるよう作業を進めている。
名簿の表紙をこれまでのエルムの樹皮のデザインから北大医学研究科・医学部の正面玄関の写真に変えた。この変更について忌憚のないご意見を頂戴したい。
・同窓会ホームページの内容を新しくした。主な変更は同窓会新聞の全ページをPDF

版にし、閲覧・ダウンロードができるようにしたこと、トップページに「最新のお知らせ・ニュース」欄を設け、同窓会の連絡やニュースを会員に迅速に伝えるようにしたことである。

2.平成24年度会計中間報告について

- 会計担当理事から、次のとおり報告があった。
- ・平成24年10月31日までの収入は会費収入が1,349万円(対予算実行率(以下同じ)約69%)、事業関連収入が4万4千円(28%)、雑収入が約15万2千円(151%)となっている。
 - ・11月以降の見込み額を加えた支出は、事業費が約1,206万5千円(99%)、総務費が約779万8千円(97.2%)、予備費が5万円となり、支出合計は1,991万3千円(97.8%)の見込みである。
 - ・10月31日時点における収支差額は収入が753万2千円ほど多いが、11月以降に多くの事業が予定されており、年度末決算は収入見込が1,803万4千円、支出見込が1,991万3千円となり、約188万円の欠損となることが予想される。
- 3.「都ぞ弥生」百年記念事業と記念祭への協賛について
会長から、「都ぞ弥生」百年記念事業と記念祭への協賛について依頼を受け、予備費から5万円を協賛金として支出したことが報告された。

【協議事項】

- 1.平成24年度定例総会及び新入会員歓迎会の開催について

- ・定例総会及び新入会員歓迎会を下記により開催することが了承された。
日時:平成25年2月11日(月・祝日)
会場:札幌パークホテル
- ・会員には1月発行の同窓会新聞に開催日、総会の議題等を掲載して周知する。

2.平成25年度会費免除について

会則第6条第2項に基づき、平成25年度に入会後55年を経過する昭和32年卒の第33期会員を会費免除とすることが了承された。

3.評議員等の交代について

- 前回(平成24年3月30日開催)の評議員会以降に交代した評議員及び予備評議員について了承された。
- 第9期:評議員 小竹 英夫先生は本年10月24日ご逝去
第56期:評議員 笠原 正典先生の理事就任に伴い、後任に武田 宏司先生、予備評議員 武田 宏司先生の後任に西澤 典子先生
第58期:評議員 田口 裕一先生の後任に古御堂 均先生
第59期:予備評議員 小笠原 和宏先生は理事就任、後任は未定
第64期:評議員 新藤 純理先生は理事就任、後任は未定
専門7期(旧):評議員 熊谷 満先生は本年6月3日ご逝去、後任は未定

4.平成23年度会計決算報告について

- 会計担当理事から、平成23年度会計決算について次のとおり報告があり了承された。
- ・平成23年度の収入は、会費収入が

17,555,000円(対予算実行率(以下同じ)約88%)、事業関連収入が164,000円(156%)、雑収入が94,868円(156%)となり、平成23年度収入は17,813,868円(89%)となった。

平成23年度収入に平成22年度繰越金2,502,874円を加えた収入合計は20,316,742円であった。

- ・支出は、事業費が11,850,650円(96%)、総務費が8,238,720円(94%)となり、支出合計は20,089,370円(94%)であった。予備費からの支出は無かった。
- ・以上の結果、平成24年度への繰越金は収支の差額227,272円となった。

また、平成23年度特別会計の決算及び同窓会費納入率についても報告があり了承された。

5.平成23年度会計監査報告について

監事から、平成23年度会計監査報告について報告があり了承された。

6.特別会計から一般会計への一時流用について

会長から、同窓会費の納入が減っている状況により同窓会事業に係る支払いが滞るおそれがあるため、この対応として特別会計から一般会計へ一時流用することとしたい旨提案があり、了承された。また、会費納入の減少が今後も続くようであれば、来年度以降の予算編成に大きく影響を及ぼし事業の縮小をも考えざるを得ないことから、収入増を図り、支出減を講じる方策、特に会費の納入を高めることについて意見交換がなされた。

フラテ99号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会雑誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の暖かいご支援により、今春発行の98号も大変ご好評をいただきました。

さて我々フラテ編集部では、現在99号発行に向けて準備を進めております。99号の発行は、今年2月下旬を予定しております。購読をご

希望の方は、同封の振込用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせていただきますことにご理解をお願い致します。

また、当編集部には98号以前の残部もございます。ご希望の方は、99号をお申し込みの際に、振込用紙にその旨をお書き添え下さい。別途、送

らせていただきます。

なお、フラテの申し込みは9月と1月の2回受け付けております。例年、二重に申し込みをされるケースが見られます。ご注意ください。

また、98号を申し込まれた方で、まだお手元に届いていない方もどうぞフラテ編集部までご一報ください

<99号の主な内容>

- ・特集記事 ・フラテ各地に行く<福岡編>

- ・教室便り ・新任教授のご紹介 ・学年紹介
- ・部活紹介 ・各講座新旧名称一覧 ・茶苑
- ・学生の広場 など

※フラテ編集部へのご連絡・ご照会は下記宛にお寄せくださるよう、お願い申し上げます。

フラテ編集部
TEL/FAX 011-736-1444(留守電あります)
E-mail:frate.med@gmail.com

総会、新入会員歓迎会のお知らせ

同窓会総会

平成24年度北海道大学医学部同窓会定例総会を下記のとおり開催しますので、ご出席をお願いします。

日時：平成25年2月11日（月・祝日）
午後6時

会場：札幌パークホテル（2階）
「パールルーム」
（札幌市中央区南10条西3丁目）
Tel 011-511-3131

議事

1.報告事項

- (1) 庶務報告
- (2) 事業報告
- (3) 編集報告
- (4) 平成24年度会計中間報告
- (5) その他

2.協議事項

- (1) 平成23年度会計決算報告
- (2) 平成23年度会計監査報告
- (3) その他

総会において、平成24年度フラテ研究奨励賞の授賞式を予定しています。

新入会員歓迎会

総会終了後、午後7時から札幌パークホテル（1階）「光華（こうか）」において、新入会員（第89期）の歓迎会を開催します。

先輩会員の皆様には、是非ご参加くださいますようお願いいたします。

会費は無料ですが、準備の都合がありますので、ご参加いただく場合は2月1日（金）までに医学部同窓会事務局（Tel・Fax：011-706-5007）にご連絡願います。

同窓会ホームページニュース募集

同窓会では、会員の方の交流をより活性化するため同窓会のホームページにニュースの欄を新設しました。会員の方の様々な情報をリアルタイムにアップしていきたいと思っておりますので、学会

開催、受賞、出版などはもとより、開業、同期会、各地のフラテ会の活動やお知らせ、勤務医の先生方の活動など、直接同窓会事務局までご連絡ください。



札幌市北区北15条西7丁目 E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
TEL&FAX (011) 706-5007 http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/

告知板

<学内・院内人事異動>

<退職>

平成24年12月31日 折館伸彦(64期) 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野准教授
(横浜市立大学教授)

<採用>

平成24年11月 1日 清水伸一(71期) 放射線治療医学分野特任准教授
藤間憲幸(80期) 放射線診断科助教
真鍋 治(80期) 核医学分野助教

<勤務命>

平成24年11月 1日 西原広史(71期) 高度先進医療支援センター特任准教授
(探索病理学講座特任准教授)

<昇任>

平成24年11月 1日 外丸詩野(69期) 分子病理学分野准教授 (同分野講師)
大場雄介(72期) 時間生理学分野教授 (腫瘍病理学分野准教授)
平成25年 1月 1日 大泉聡史(68期) 呼吸器内科学分野准教授 (内科 I 講師)

<配置換>

平成24年11月 1日 天野虎次(76期) 高度先進医療支援センター特任助教
(腫瘍内科学分野特任助教)

<同期会案内>

★44期「獅子の会」

卒業45周年記念同期会

1. 日時：平成25年9月14日（土）
2. 場所：支笏湖畔・丸駒温泉
(北海道千歳市幌美内番外地)
3. 企画：由緒ある温泉の風情を共有しま

しょう。
サプライズゲストを予定しています。
翌日北大でフラテ2013も行われます。
詳細については別途案内します。
(幹事：石垣・新富・中村・山本)

<フラテ会案内>

東京フラテ会のご案内

恒例の東京フラテ会を、今年も北大医学部学生有志の研修会上京に合わせ、右記のとおり開催します。学生を歓迎し、互いに懇親を深めたいと存じますので、皆様万障お繰り合わせの上ご参加下さいませよう、ご案内申し上げます。なお、今年の講演会の講師は、東京慈恵会医科大学内科の田尻久雄教授（フラテ52期）です。

東京フラテ会会長 松谷有希雄 (51期) 記
日時：平成25年3月23日（土）
17時30分～ 講演会
18時30分～ 総会、懇親会
場所：学士会館
(東京都千代田区神田錦町3-28)
会費：1万円（予定）

<当選>

勝沼栄明先生（76期）が、平成24年12月16日に行われた、第46回衆議院議員選挙に

て、自民党比例区として当選されました。

新刊書紹介



「新医師臨床研修制度を廃止せよ」
竹村 敏雄(24期)著
文芸社 ¥1,050

著者の竹村敏雄先生は昭和23年に北大医学部を卒業された札幌一中4修出の秀才である。札幌医科大学産婦人科教室で中国より帰られた明石勝英教授時代の助教を経て、昭和32年に札幌で開業され、札幌市医師会理事も長年務められて医療教育や医療行政に詳しい論客である。

前回にも開業医の実態や医師不足に関して言及した著書はあるが、今回は何かと

問題のある新医師臨床研修制度の廃止を訴えた著書である。戦後インターンという制度が押しつけられ、これが後の新米医師にとって大変役に立ったと思っている者と、全く邪魔者扱いされた者もいたようだが、この制度を経験した者の一人として興味深く読ませていただいた。第一章の医師不足の実態に始まり、その背景や制度の弊害から医師不足の解消に向けての意見や、看護師、助産師不足の解消にも及んでいる。また第二次世界大戦の終末が色々な事情があったにせよ終戦とか進駐軍とかいう名におきかえられた気がするのも同感であり、第八章の日本人国家観として書かれている。6年後輩の筆者であるが、戦後の同時代の医療関係者として、また医療発展の目覚ましい現代医師にとってもこの著書が非常に面白く読まれ新しく提言されているのではないかと思う次第です。

(30期 前川隆)



「食道がん
～正しい知識で
より良い治療を～」
細川 正夫(44期)監修
講談社 ¥1,200

監修者は外科医であると同時に病院経営者というふたつの顔を持つ。卒業は昭和43年第44期生であり、いまなお現役バリバリで臨床に明け暮れる毎日である。

食道癌を中心とした消化器癌の治療を目的として、1981年3月札幌市内に病院を構えてはや30年あまり、悪性腫瘍の診断、治療、再発、終末期の一貫診療をモットーに、前に進み続けている。ライフワークの食道癌は、他の癌にくらべると罹患数は少ないものの、転移しやすく進行の早い癌であり、治療の中心となる手術は他の消化器癌にくらべても難易度が高く、また患者さんの侵襲も大きいという疾患である。

本書は、患者さんを含め一般の方を対

象としたもので、イラストを中心に非常にわかりやすく食道癌を解説したものである。医師の説明は難解なことが多く、術前の説明の際は、患者さんや家族はかなりの緊張状態にあり、話された内容が正しく理解されていないこともしばしばである。本書は最初に具体的にステージの異なる3人の患者さんの治療法の選択について書かれている。そのあとに食道癌の知識、検査および診断についての解説が続く。治療法に関しては、監修者の専門とする外科手術はもとより、内視鏡治療から、放射線化学療法にいたるまでをイラストをまじえて網羅されている。最終章には、退院後の食事から社会復帰まで述べられており、この本一冊で今日の食道癌の診断から治療にかかわるすべてのことが理解することができる。一般の方を対象に書かれた本であるが、医療従事者、専門外の方にもお勧めの一冊である。

(66期 久須美貴哉)



「解剖学講義改訂3版」
故 伊藤 隆(会員2)原著
高野 廣子(49期)改訂
南山堂 ¥11,550

この本は、北海道大学医学部で解剖学教授を長年勤められた伊藤隆先生が書かれた「解剖学講義」の改訂版です。伊藤隆先生は「組織学」の著者として名高いのですが、肉眼解剖学の教科書も書かれています。この本がどうして書かれたのかを紹介しつつ、改訂に込めた自分の思いについても述べたいと思います。

解剖学講義は、伊藤先生が臨床医を目指す医学生のために執筆されました。そのきっかけは、北大病院に入院されたときに多くの教え子のお見舞いを受け、解剖学者として臨床医に役立つことをしたいと強く思われたことにありました。初版は1983年にできました。基本となる解剖学の知識に加えて、解剖学と臨床医学との接点が網羅されており、読みやすく書かれていたことから、医学生の間で人気が高まり、ついには全国の多くの医学校で教科書として採用されるに至りました。私は伊藤先生の崇高な思いが込められたこの本が末永く医学生に愛読されることを願って、改訂しています。

改訂3版における主な改訂点は、1. 解剖学用語を国際解剖学用語委員会と日本解剖学用語委員会から発表されている最新のものに統一、2. 図を増やし2色刷りへと変更、3. 総論の内容を充実、4. 神経学の内容を更新、5. 解剖学に関連する臨床事項を索引で引けるようにした、などです。

今回の改訂により教科書として一層洗練されたと思うので、同窓会員の皆様に1冊手元に置かれることをお奨めします。

(49期 高野廣子)



「帰してはいけない外来患者」
松村 真司(67期)他編集
医学書院 ¥3,990

松村真司先生は、総合診療・プライマリケアで大変高名な指導医で、関連雑誌の編

集委員もなさり著作も多く、御自分のクリニックで学生や研修医の教育もされている。私は先生の東大大学院時代からおつきあいがあり、自宅から近いので家族もお世話になっている。この度、先生は大変教育的で、読み物としても面白い本を出された。書名もドキッとさせるもので、何となく手に取りたくなる。大変売れ行きも良いと聞いている。

総論部分には初学者に覚えてもらいたいルールや基本的な考え方が述べられているが、各論の症例集は外来に慣れてきた医師にも是非読んでもらいたい。気がつかないうちに、陥りやすいようなエピソードが多く、こちらの方がドキドキする。

1) 過呼吸症候群のような?糖尿病性ケトアシドーシス! 2) 若い女性によくありそうな失神?ではなく、子宮外妊娠による出血! 3) 77歳になって初めての肩こりがくも膜下出血 4) 痛みのない心筋梗塞などなどももちろんそれぞれの症例できちんと基本を大切に考えれば解ける鍵がある。単なる当て物ではなく、思考過程・推論過程を習得できるように提示がされていて大変よくできた構成である。

研修医だけでなく、指導医にもご一読をお勧めする。外来の鑑別診断のヒントに、最悪のシナリオの除外のために大変役立つであろう。救急外来のナースのトリアージに役立っているという声も聞いた。これからは診療・教育・研究に先生のモットーである「Think globally, act locally」が大いに発揮されることを陰ながら祈っている。

(53期 大生定義)



「日本プライマリ・ケア連合学会
基本研修ハンドブック」
日本プライマリ・ケア連合学会編
松村 真司(67期)責任編集
南山堂 ¥4,200

よく聞かれる質問に「プライマリ・ケアっていったい何ですか」がある。私のような医師がやっている仕事の大半は確かにプライマリ・ケアそのものである。しかし、その質問にきちんと答えようとするとなかなか難しい。自分でもそう思うのだから、研修過

程の人たちにとってはもっとわかりにくいはずである。このたびそんなわかりにくい分野を志す学生・研修医、特に後期研修医を対象にしたハンドブックが出版された。本書は2004年に出版された「プライマリ・ケア医の一日-日本プライマリ・ケア学会基本研修ハンドブック」の改訂版であるが、前書の理念を継承しつつ、近年注目を集めているポートフォリオを用いた学習方法を軸に、ほぼ全面的に書き換えられた。本書は初学者がどのような視点で経験を積み、そしてどのように指導医がフィードバックを与えていくか、医学教育の専門家とプライマリ・ケアの専門家がタッグを組んでその学習方法を示している。もちろん地域で必要なプライマリ・ケアの知識・技術・経験は本書のボリュームでは到底網羅できるはずもなく、本書はその大まかな方向を示している手引きの書にすぎない。しかし現在研修中の若い医師たちとともに、地域でそんな若い医師たちに対し、苦労を重ねながら指導している先生方の手助けとなることを願って責任編集を務めさせて頂いた。後期研修医や指導医はもちろん、ポートフォリオ学習に興味のある他科の先生にもご一読頂ければ幸いです。

(67期 松村真司)



「わかりやすい
構造構成理論
~緩和ケアの本質を解く~」
岡本 拓也(76期)著
青海社 ¥2,310

医療は、言うまでもなく「人間の営み」です。

「人間」や「人間の営み」について、「人間の学」の根本に位置する哲学は、深く長く執拗なまでに、考えに考え抜いて参りました。それも人類の最高の英知が集結して。これを利用しない手はありません。哲学には人類の英知が詰まっています。

また、最近では、これら哲学の洞察を裏付けるような形で、脳科学や認知科学の成果が集積されてきています。

本書は、これら人類の英知の成果を利用して、緩和医療の根本的な問題を論じ

た本です。但し、ひとり緩和医療にとどまらず、医療全般に通用する内容を持っています。なぜならば、緩和医療は、他の専門科のように臓器や身体のシステム、年齢、性別などに特徴づけられた専門性を持つ科ではなく、すべての医療の根本となるような内容を持つ臨床科ですので、緩和医療の根本について論じることは、結果的に医療の根本について論じることにもなるからです。出版社の方が本の帯に付けてくれたキャッチコピー「構造構成主義に脳科学や認知科学の成果を援用し、『ひとりで成り立つ医療の源の視点』をひも解く」というのは、まさに本書の内容をよく表してくれています。

たとえば、医療者が患者を診察し評価するのは、「認識」の1つの形ですから、そもそもモノをどのように認識しているのか(認識論)を知ることは重要です。また、患者との医療面接の際には言葉を使いますから、「言葉」とは何かを考えることは大切です。他にも、「痛み」や「息苦しさ」や「こわさ(北海道弁)」等の「辛さ」は患者の主観ですから、「主観・客観の問題(主客問題)」を深く理解することは大事なことであるはずで

考えてみれば、これらは当たり前のことです。医療の最も根本的な部分を深く見つめて行くと、否応なく哲学的な問いに突き当たります。医療が「人間の営み」である以上、それは当然のことです。ですから、正面切って本書のような内容を扱った本がこれまでなかったことの方が、逆に不思議な気がします。

本書を読むことで、おそらく多くの読者が新しいモノの見方をされるようになるのではないかと期待しています。しかも、その新しいモノの見方は臨床に直結して役立つようなものであると自負してまいります。「明日からモノの見方が根本的に変わる」とは、出版社が帯に付けてくれたもう1つのフレーズです。

是非、本書を手にとってお読みいただき、先輩諸先生方の忌憚のないご意見をお聞かせいただきましたら誠に幸いです。宜しくお願い致します。

(76期 岡本拓也)

ご逝去者

新聞143号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成23年			11月13日	永 潤 實	36
4月26日	中 畑 成 紀	専3	11月15日	立 野 太刀雄	専旧6
12月12日	小野塚 久 夫	62	11月19日	本 間 隆	専旧6
12月26日	下 田 孝	専3	11月24日	藤 本 征一郎	39
平成24年			11月25日	岡 田 瑞 穂	専新6
7月31日	青 木 一 夫	権太	11月30日	鈴 木 利 一	専旧7
9月3日	只 野 孝 也	専新7	12月2日	矢 田 一	17
9月6日	滋 賀 秀 明	12	12月2日	内 野 純 一	33
10月10日	加 藤 富 男	専3	12月24日	前 田 徳 尚	21
10月19日	坂 本 典 一	32	12月25日	國 田 晴 彦	41
10月22日	黒 崎 嘉 文	28	12月30日	小 村 孝	29
10月24日	小 竹 英 夫	9	平成25年		
10月28日	國 分 昇	専5	1月3日	恩 村 雄 太	22
11月7日	新 沼 竜之助	33	1月6日	渡 辺 正 義	14
11月10日	小 池 義 郎	28	1月8日	小 島 良 友	29
11月11日	坂 本 克 輔	47			

同窓会新聞は142号からHP上でもご覧いただけるようになりました。アドレスは次の通りです。
http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/news/index.htm
ご意見等ございましたら、事務局までご連絡くださいますよう、お願いいたします。

一面の写真説明

「北大病院陽子線治療センター」

白土 博樹(57期)

日本のトップ30の研究に対する超大型予算「最先端研究開発支援プログラ

編集後記

あけましておめでとうございます。新しい年に、浅香会長、田中編集委員長はじめ新しい体制のもと、諸先輩から脈々と続いた同窓会の流れに、時代に合わせて様々なものを取り込み、新コーナーやインターネットなど、同窓会新聞の新しい展開に関わることができたことは、大変光栄に感じております。あちこち新しくなった同窓会新聞の評判を聞くのが楽しみなような、心配なよ

ムにて進められてる「持続的発展を見据えた『分子追跡放射線治療装置』の開発」で、北海道大学病院に世界初の「分子追跡陽子線治療」が開発導入されます。写真は平成23~24年に北海道大学が建設してくれた陽子線治療センターです。

うな複雑な気持ちでもあります。私も昨年4月に大学に戻って心機一転の年でもありました。大学という不変の軸があって、そこから異動したり、あるいは新天地から戻らなくとも、教室、先輩、後輩、同期、同僚、友人といった繋がりを、さらに縦横に紡いでゆく同窓会という組織を、時代に合わせて変わりながらも変わらずに続けていくためのお手伝いができたらと思います。

(75期 石田 雄介)

印刷所 株式会社DNP北海道

〒065-0007 札幌市東区北7条東11丁目1番1号
代表(011)750-2205